『懐風藻』所載「於長王宅宴新羅客」詩群について

－ 渡倭系作者と非渡倭系作者の観点から

伊藤政彦*

（e-mail ： shinkiku@hanmail.net）

目　次

1. はじめに
2. 作者とその出自
3. 詩群に見られる特徴的な要素について
　3.1 別離の悲愁・慰労・馳思
　3.2 主客渾然・主客同心
　3.3 華夷思想の発露
4. おわりに

1. はじめに

現存する日本最古の漢詩集『懐風藻』には長王宅(宝宅・佐保の宅・作宝楼)と呼ばれた長屋王の私邸に於いて新羅からの使者を饗応した際に詠まれた「秋日於長王宅宴新羅客」あるいは「於宝宅宴新羅客」との題を持つ詩群が収載されている。すなわち、①秋日於長王宅宴新羅客　并序(52　山田史三方)[1]、②秋日於長王宅宴新羅客　賦得風字(60　肖奈王行文[2])、③初秋於長王宅宴新羅客(62　調忌寸古麻呂)、④秋日

＊　又松情報大学 観光日本語科 助教授

1) 括弧内の数字は作品番号。以下『懐風藻』の原文及び訓読文、現代語訳、作品番号は原則として小島憲之(1964)『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粋』(日本古典文学大系69)岩波書店. による。

2) 一般に「背奈行文」とされるが、大野保(1957)によれば室町末期の書写に当る現存最古の『懐風藻』写本である蓬左文庫所蔵の尾州家本をはじめ、慶長年間書写の内閣文庫所蔵の来歴志本、

JAPAN WORLD CULTURE

於長王宅宴新羅客 賦得稀字(63 刀利宣令)、⑤秋日於長王宅宴新羅客 并序 賦得前字(65 下毛野朝臣虫麻呂)、⑥於宝宅宴新羅客 賦得烟字(68 長屋王)、⑦秋日於長王宅宴新羅客 賦得流字(71 安倍朝臣広庭)、⑧秋日於長王宅宴新羅客 賦得時字(77 百済公和麻呂)、⑨秋日於長王宅宴新羅客 賦得秋字(79 吉田連宜)、⑩秋日於長王宅宴新羅客 賦得難字(86 藤原朝臣総前)の10首である。[3] これらの作品はいわゆる「長屋王詩苑」に集った当代を代表する文人らが残したものであるが、[4] 作者の出自を見ると渡倭系[5] と思われる人物が多いことに気付く。この事実は同じく『懐風藻』に見える長屋王宅での春秋の詩宴で詠まれた作品群の作者の出自と比較する時、あらためてその特徴が明確になる。春秋の詩宴における作品及び作者をまとめると、①宴長王宅(50 境部王)、②晩秋於長王宅宴(66 田中朝臣浄足)、③初春於作宝楼置酒(69 長屋王)、④初春於左僕射長王宅讌(75 百済公和麻呂)、⑤於左僕射長王宅宴(82 箭集宿禰虫麻呂)、⑥春日於左僕射長王宅宴(84 大津連首)、⑦秋日於左僕射長王宅宴(90 藤原朝臣宇合)、⑧初春在竹渓山寺於長王宅宴追致辞并序 (104 釈道慈)、⑨春日於左僕射長屋王宅宴(106 塩屋連古麻呂) となる。以下で考察するように「於長王宅宴新羅客」詩群の作者は10名のうち6名までが渡倭系の文人であると考えられるのに対し、春秋の宴で詠まれた詩の作者のうち確実に渡倭系と言えるのは百済公和麻呂ただ一人である。このように新羅使送別の宴の作者に渡倭系の文人が多い点についてはさまざまな理由が考えられる。例えばただ単に前者の作品群が詠まれた宴席に偶然渡倭系作者が多数参席していた、あるいは撰録の際に偶然渡倭系作者の作品が多く採られたと考える

江戸初期書写の内閣文庫所蔵の林家本、および静嘉堂文庫所蔵の脇坂本などの諸写本、更に刊本としては最初の天和4年刊本はいずれも「背奈王行文」を「肖奈王行文」と作っていること、また『万葉集』巻16-3836の左注に「消奈行文」と見えること、更には佐伯有清(1991)の行った検証に基づき本稿では「肖奈行文」とする。

3) これら10首の詩のうち長屋王の作品の詩題が「於宝宅宴新羅客」、調忌寸古麻呂の作品が「初秋於長王宅宴新羅客」となっている以外の8首はいずれも題が「秋日於長王宅宴新羅客」である。したがって本稿ではこの詩群を「於長王宅宴新羅客」詩群と呼ぶこととする。

4) 星野五彦(1980:95)によると、新羅使送別宴で詩を残したこれらの10人の人物のうち7人の作品が『万葉集』にも収められている。即ち、山田史三方(7首)、肖奈王行文(1首)、刀利宣令(2首)、長屋王(5首)、安倍朝臣広庭(4首)、吉田連宜(4首)、藤原朝臣総前(1首)。このことからも彼らが当時の代表的な文人であったことがわかる。

5) 古代において韓国や中国から日本へ渡った人々を日本では一般に「帰化人」または「渡来人」と呼んでいる。「帰化人」とは彼らの移住を『日本書紀』で「帰化」「投化」「化来」等と表記していることに基づく用語だが、この用語は中華思想に依拠し「王化」が及ばない「夷狄」が天皇の徳を敬慕して自ら日本へ渡ったという意味を内包している。しかし『三国史記』に「虜人」らが日本に連行されたとの記録が見える事実や、移住民の中に天皇の支配が及ばない地方勢力に帰属した人々もいたこと、さらには自ら移住した人々の場合でも社会的、経済的な理由が多かったと思われる点など「帰化人」という用語の内包する問題点が指摘され、使われ始めたのが「渡来人」という用語である。とはいえ「帰化人」であれ「渡来人」であれ日本の視角のみが反映された用語であり、より客観的な用語の使用が必要であると思われる。本稿では李妍淑(1998)に従って中国や韓国から日本へ移住した人々とその後裔を「渡倭人」または「渡倭系」と呼ぶこととする。

www.kci.go.kr

こともできよう。しかし、その一方で辰巳正明(1990:103)は「新羅の使節を迎えるということから、この配慮は長屋王の見せた主人としての気くばりであったのだろう」と指摘している。もしこれが事実であるなら、何らかの形でそうした事情が作品に反映されている可能性もあるのではないか。

本稿では上述の新羅使送別宴で詠出された作品に共通する要素の一部について検討を加え、渡倭系および非渡倭系作者の作品にそれぞれ何らかの特徴が表われていないかを考察する。そしてこうした作業を通じて長屋王詩苑の性格の一端に触れることができればと考えるものである。

2. 作者とその出自

ここでは長屋王宅での新羅使送別の宴で詩を残している文人たちの出自について検討してみることとする。詩群の作品は題に「賦得◎字」と見える詩とそうでない詩に分かれる。「賦得◎字」とあるのは所謂「探韻」によるもので、文人たちは紙片に書かれた韻字を一枚ずつ探り取って各自その韻で詩を作ったと思われる。「探韻」は「探字」とも言い、梁の時代から始まったという。6) 詩題に「賦得◎字」と見える「有探韻詩群」とも呼ぶべき作品を残しているのは肖奈王行文、刀利宣令、下毛野朝臣虫麻呂、長屋王、安倍朝臣広庭、百済公和麻呂、吉田連宜、藤原朝臣総前の8名である。このうち肖奈行文、刀利宣令、百済和麻呂、吉田宜が渡倭系と考えられる。すなわち「有探韻詩群」のうち半数がいわゆる渡倭系知識人によって詠まれた作品である。以下、各作者の出自を具体的に見てみる。

肖奈行文は『続日本紀』750年(天平勝宝2)春正月庚寅朔丙辰条に「従四位上、肖奈王福信等六人賜高麗朝臣姓」との記事が見えるが、この高麗朝臣は『新撰姓氏録』左京諸蕃下に「高麗朝臣　出自高句麗王好台七世孫延典王也」とあることから肖奈氏は高句麗系渡倭人であったことがわかる。更に肖奈行文本人については『続日本紀』789年(延暦8)10月戊寅朔乙酉の高倉朝臣福信(709～789)の薨伝に「(上略)福信、武蔵国高麗郡人也。本姓肖奈。其祖福徳、属唐将李勣抜平壌城、来帰国家、為武蔵人焉。福信、即福徳之孫也。小年随伯父肖奈行文入都。(下略)」とあることから福信の祖父である福徳が高句麗の滅亡に際して日本に渡ったことがわかり、福信の伯父に当たる肖奈行文は高句麗系の渡倭人2世であると見て差し支えあるまい。

次に刀利宣令の刀利(＝土理)氏は『続日本紀』761年(天平宝字5)3月丙戌朔庚子条に刀利甲斐麻呂ら7人に丘上連を賜うとの記事が見えるが、ここで刀利氏は百済系氏

6) 岡田正之(1946)『近江奈良朝の漢文学』養徳社. p.232

www.kci.go.kr

族のグループに分類されている7) 。従って無姓の土理(刀利)氏であると考えられる刀利宣令もやはり百済系渡倭人と見てよかろう。

また、百済公和麻呂については『新撰姓氏録』左京諸蕃下に「百済公　出自百済国都慕王廿四世孫汶淵王也」とあり、同書右京諸蕃下に「百済公　　因鬼神感和之義。命氏謂鬼室。廃帝天平宝字三年。改賜百済公姓」と見え、さらに同書和泉国諸蕃に「百済公　　出自百済国酒王」とあるように伝を異にする三系統が知られるが、いずれもその祖を百済の王族としている。百済公和麻呂がこのうちのどの氏族に属するかは断定できないものの、いずれにせよ和麻呂もその名が示すごとく百済系と考えて間違いなかろう。

次に、吉田連宜の吉田連は『新撰姓氏録』左京皇別下に

> 大春日朝臣同祖。観松彦香殖稲天皇鎰孝昭。皇子天帯彦国押人命四世孫彦国葦命之後也。昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彦天皇御代。任那国奏曰。臣国東北有三己汶地。上己汶。中己汶。下己汶地方三百里。土地人民亦富饒。与新羅国相争。彼此不能摂治。兵戈相尋。民不聊生。臣請総軍令治此地。即為貴国之部也。天皇大悦。勅群卿。令奏応遣之人。卿等奏曰。彦国葦命孫塩垂津彦命。頭上有贅三岐如松樹。因号松樹君。其長五尺。力過衆人。性亦勇悍也。天皇令塩垂津彦命遣。奉勅而鎮守。彼俗称宰為吉。故謂其苗裔之姓。為吉氏。男従五位下知須等。家居奈良京田村里間。仍天璽国押開豊桜彦天皇鎰聖武。神亀元年。賜吉田連姓。吉本姓。田取居地名。今上弘仁二年。改賜宿禰姓也。続日本紀合。

とある。この記述を信ずるならば、吉田連の祖は孝昭天皇の子孫である彦国葦命の孫で、崇神天皇の時代に韓国に派遣された日本人塩垂津彦となるが『続日本後紀』837年(承和4)6月壬辰朔己未条には、右京人左京亮吉田宿禰書主、越中介同姓高世らが興世朝臣と改賜姓され、始祖は塩垂津でその子孫の吉大尚、少尚らが百済から帰国し、医術を伝えかつ文芸にも通じていたことが記されており、伝を異にしている。更に『日本文徳実録』850年(嘉祥3)11月甲戌朔己卯条に見える興世朝臣書主の卒伝には「書主

---

7) 『続日本紀』761年(天平宝字5)3月丙戌朔
庚子、**百済人**余民善女等四人賜姓百済公。韓遠智等四人中山連。王国嶋等五人楊津連。甘良東人等三人清篠連。**刀利甲斐麻呂等七人丘上連。**戸浄道等四人松井連。憶頼子老等卌一人石野連。竹志麻呂等四人坂原連。生河内等二人清湍連。面得敬等四人春野連。高牛養等八人浄野造。卓杲智等二人御池造。延爾豊成等四人長沼造。伊志麻呂福地造。陽麻呂高代造。烏那竜神水雄造。科野友麻呂等二人清田造。斯臘国足等二人清海造。佐魯牛養等三人小川造。王宝受等四人楊津造。答他伊奈麻呂等五人中野造。調阿気麻呂等廿人豊田造。**高麗人**達沙仁徳等二人朝日連。上部王虫麻呂豊原連。前部高文信福当連。前部白公等六人御坂連。後部王安成等二人高里連。後部高呉野大井連。上部王弥夜大理等十人豊原造。前部選理等三人柿井造。上部君足等二人雄坂造。前部安人御坂造。**新羅人**新良木舎姓県麻呂等七人清住造。須布呂比満麻呂等十三人狩高造。**漢人**伯徳広足等六人雲梯連。伯徳諸足等二人雲梯造。

www.kci.go.kr

右京人也。本姓吉田連。其先出自百済」となっており、やはり百済系であると考えられる。

吉田連は『新撰姓氏録』では「皇別」に載せられているが、現在ではこれが「仮冒」であることが定説になっており、8) 上述の塩垂津彦の伝承も造作と思われる9) ことから、吉田宜は百済系渡倭人と見てよいだろう。

さらに「有探韻詩群」が詠まれた宴とは別の機会である可能性もあるが長屋王宅で催された新羅使送別宴で詩を残している人物として山田史三方と調忌寸古麻呂が挙げられる。まず山田史三方の山田氏は『新撰姓氏録』右京諸蕃上に「山田宿禰　出自周霊王太子晋也」「山田造　山田宿禰同祖。忠意之後也」とあり、同書河内国諸蕃に「山田宿禰　出自魏司空王昶也」「山田連　山田宿禰同祖。忠意之後也」「山田造　山田宿禰同祖。忠意之後也」とある。更に同書和泉国未定雑姓にも「山田造　新羅国天佐疑利命之後也」と見える。これらの山田氏はいずれも元来「史」を姓(カバネ)とする氏族であり、山田史三方がこれらのうちのどの系統に属するのかは明らかでないが、山田史の後裔氏族である山田連、山田造、山田宿禰が全て渡倭系の伝承を持っていることから、山田史三方も中国あるいは新羅からの渡倭系であるとみてよいであろう。

次に調忌寸古麻呂の調忌寸氏は『新撰姓氏録』逸文に

> 姓氏録曰。阿智使主男都賀使主。大泊瀬稚武天皇諡雄略。御世。改使主賜直姓。子孫因為姓。男山木直。是兄腹祖也。本名山猪。次志努一名成努。直。是中腹祖也。次爾波伎直。是弟腹祖也。(中略)姓氏録曰。弟腹爾波伎是也。山口宿禰。文山口忌寸。桜井宿禰。**調忌寸**。谷忌寸。文宿禰。并大和国吉野郡文忌寸。紀伊国伊都郡文忌寸。文池辺忌寸等八姓之祖也。

と見える。その祖とされる都賀直は阿知使主の子であり、調忌寸氏が倭漢系の氏族であることがわかる。

倭漢氏は『古事記』『日本書紀』によれば応神天皇の時代に渡倭した記事が見え、785年(延暦4)に同氏の後裔にあたる坂上苅田麻呂がその上表文中で「臣等はもと是れ後漢の霊帝の曾孫阿智王の後なり」と主張して以来、その出自を漢の王室に結び付けたが、実はその氏族名である「アヤ」はその祖が伽倻、とりわけ安羅伽倻から渡倭したことに由来する10) と考えられる。とはいえ、坂上系図に引用するところの新撰姓氏録逸文によると約60の氏族が坂上氏の同族、即ち倭漢氏系と考えていたことがわかり、彼等の全てが血縁関係を持つ一つの氏族であったとは考えがたい。結局本稿では倭漢氏は「桧前を中心とした地域に居住した渡倭人集団が地縁関係による擬制的同族結合をすすめた結果成

8) 佐伯有清(1971)『新撰姓氏録の研究 研究篇』吉川弘文館. pp.370-371
9) 末松保和(1961)『任那興亡史』吉川弘文館. pp.31-33
10) 上田正昭(1965:71)等による。

www.kci.go.kr

立したものであり、その主力の出身地が朝鮮の安羅であった」とする加藤謙吉(1986:60)の説に従う。したがって倭漢氏の一枝族であった調忌寸古麻呂も渡倭系であり、なかんずく伽倻系である可能性も指定できよう。

一方、下毛野朝臣虫麻呂、長屋王、安倍朝臣広庭、藤原朝臣総前は非渡倭系と考えられることから、長屋王宅での新羅使送別宴で作品を残している詩人10名の半数以上に当たる6名が渡倭系であったことがわかる。

3. 詩群に見られる特徴的な要素について

さて「於長王宅宴新羅客」詩群に属する作品の詠出年代については諸説があって未だ定見を得ないが「探韻」が集団で行う作詩行為であることから、詩題に「賦得◎字」と見える所のいわゆる「有探韻詩群」は恐らく同じ宴席で詠まれたであろうとする点が先学により指摘されている。この見解にしたがえば、詩群のうち山田三方(＝52)及び調古麻呂の作品(＝62)を除く8首は同じ宴席で詠まれたと見てよいであろう。これら「於長王宅宴新羅客」詩群の作品は719年(養老3)閏7月、723年(養老7)8月、726年(神亀3)7月のいずれかに帰国の途に就いた新羅使節のための餞宴で詠出されたと考えられる11)。

井実充史(1994)はこれらの作品に表われている特徴として「長屋王の風雅性賛美」「中華思想」「参加者全体の風雅性の強調」「離愁」を挙げているが、本稿では先行研究に導かれつつ「別離の悲愁・慰労・馳思」「主客渾然・主客同心」「華夷思想の発露」といった諸要素が詩群の各作品にどのように表われているかについて渡倭系、非渡倭系に分けて見ていくこととする。

3.1 別離の悲愁・慰労・馳思

一連の作品が新羅使送別宴の席で詠まれたものである以上、別れを惜しみ、憂い、そ

11) 主要な先行各論考の推定する詩群の諸作品の製作年代は以下の通り。

	林古渓 (1958)	小島憲之 (1964)	小島憲之 (1965)	石母田正 (1973)	村田正博 (1984)	鈴木靖民 (1985)	井実充史 (1994)
719年(養老3) 閏7月					52 62		52 62
723年(養老7) 8月			726年(神亀3)7月である可能性が高いが、723年(養老7)8月の作詩である可能性もある。	52 60 63 65 68 71 77 79 86	68 71	52 60 63 65 68 71 77 79 86	60 63 65 68 71 77 79 86
726年(神亀3) 7月	全作品	全作品		62	63 65 77 79 86	62	
保　留					60		

www.kci.go.kr

の労苦を慰め、離別後の相手に対して思いを馳せるといった要素が詠み込まれるであろうことは容易に想像がつく。実際に詩群の詩の多くが小島憲之(1965:1285)によれば「国境や民族を越えた人間相互の暖かい交流をみる」ものであることが指摘されており、鈴木靖民(1985:156)はこれらの詩について「新羅の客と別離を惜しむ日本官人のヒューマニスティックな感懐であり、そこには国境や民族や政治を超越した人間相互の交歓の情をうかがい知る」と評している。新羅と日本という言語の通じない両国の文人同士ではあったが、漢詩文という両国に共通の文字と形式がそれを可能にしたと言える。

それでは詩群の作品にこうした惜別や馳思の感情は具体的にどのように表われているであろうか。まず渡倭系作者らの作品に、

> **新知未幾日。送別何依依。山際愁雲断。人前楽緒稀。（63 刀利宣令）**
> (新羅の客と新しく知人となってからまだ幾日もたたないのに、別れを見送ることはなんと慕わしいことか。山の際には愁わしげな雲が絶えてしまったが、宴会にいる人々の前[あいだ]には[別離の悲しみが深くて]楽しいこころは少い)

とある。「依依」はここでは「離れるのに忍びない意。思ひ慕ふさま」「心が惹かれる。未練がある」(諸橋轍次『大漢和辞典』)ことを意味する。知り合って数日で別れなければならないことへの名残惜しさを詠んでいるのである。次に、

> **青海千里外。白雲一相思。(77 百済公和麻呂)**
> (客と別れた後も青い海に千里を距てていて、白雲を眺めては[白雲に寄せて]ひたすら思い合う事であろう。)
> **一去殊郷国。万里絶風牛。未尽新知趣。還作飛乖愁。(79 吉田連宜)**
> (一たび別れて去って行くとお互に国を異にし、万里の間は風馬牛の如く交際が絶える。まだ新しく知己となった情趣[興趣]をも十分尽さないのに、かえって更にまた遠くに別れゆく[別れそむく]という憂をなすことだ。)

といった表現を挙げることができる。白い雲を眺めながら千里の海を挟んで新羅と日本で互いに思い合うであろうという百済公和麻呂の表現からは強い離別の悲愁と相手への思いが感じられる。また、吉田連宜の「万里絶風牛」という表現には慕い合う者同士が遠く隔たっていて会えないことが感じられ、「未尽新知趣　還作飛乖愁」という両句からは上でみた63番の作品と同様、知り合ったばかりなのにもう別れねばならないことに対する名残惜しさと愁いが感じられる。

これらの表現はいずれも別離の悲愁、相手への馳思を詠んだ表現として挙げることが出来るが、注目すべきは刀利宣令、百済公和麻呂、吉田連宜はみな百済系渡倭人であるという事実である。660年に百済が新羅と唐の連合軍の攻撃により滅んで以来、60余年を経て百済系渡倭人たちもかつて自らの祖先の国を滅ぼした新羅の使者に対してこのように別れの悲しみ

www.kokugo.jp

を述べたのであった。一方、非渡倭系作者の作品にも次のような惜別や慰労の表現が見える。

莫謂蒼波隔。長為壮思篇。(68 長屋王)
(日本と新羅との間を青い波が遠く隔てていると言い給うな。いつまでも宴席に於ける盛んな思いを詩によって晴らそう。)

この詩の作者長屋王は新羅使送別宴の主である。「長為壮思篇」の「壮思」は林古渓(1958)は「海を渡つて一遊せんとの壮思」とする。また句末の「篇」は群書類従木版本および林家本による。大野保(1957)によると寛政刊本では「延」、尾州家本および脇坂本では「筵」、狩谷掖斎校本では「篇天」となっているが、本稿では第4句目に「無疲風月筵」という表現があり韻字「筵」であることから「篇」とするべきとした小島憲之(1964:462)に従う。いずれにせよ新羅と日本は海を隔ててはいるが、相手に対して思いを馳せるとの内容が詠まれていると言えよう。

次に、非渡倭系作者らの新羅使に対する「慰労」の表現としては、

傾斯浮菊酒。願慰転蓬憂。(71 安倍朝臣広庭)
(菊を浮べたこの酒を十分に飲み傾けて、風に飛ぶ蓬のようにさすらいの憂[新羅の客の旅の憂]を慰めよう。)

が挙げられる。「転蓬」は「風に飛ばされて転り行く枯よもぎ」(諸橋轍次『大漢和辞典』)で漂泊、流寓、流浪することをも指す。ここでは海をわたってはるばると客地にやって来た新羅の使者を指している。「菊酒」は菊花酒とも呼ばれ「菊の花と葉を黍米に入れて醸して、来年の重陽の節に不祥を祓ふために飲む酒」(諸橋轍次『同上』)である。菊酒の杯を傾けて新羅使の旅の寂しさ、憂いを慰めようという内容である。なお、別れの悲しみを端的に詠んでいる表現としては

贈別無言語。　愁情幾万端。(86 藤原朝臣総前)
(送別に際して悲しさのために何らの言葉も出ない。うれいの情はとめどもなくわき出るばかり。)

が挙げられよう。別れの愁い、悲しみは言葉では表現できないほどであるというのである。詩群の作品にはこのように渡倭系と非渡倭系を問わず、遠路はるばる新羅から日本を訪れた一行を慰労し、別れを惜しむ気持が多く詠まれている。

3.2 主客渾然・主客同心

当該詩群には上でみたように別れを悲しみ愁える表現と同時に詩酒の宴において新羅と日本の参加者が渾然一体となって文雅の交わりを楽しむ様子が多く詠まれている。これらの表現から新羅使送別の詩宴が主客ともに国や身分の違いを忘れて酒食をともにし語らい合

www.kci.go.kr

いながら時のたつのを忘れさせる自由な空間であったことが看取される。まず渡倭系作者の作品に

羽爵騰飛。混賓主於浮蟻。清談振発。忘貴賤於窓雞。(52序 山田史三方)
(雀の形をして頭尾に翼のある酒杯を盛んにとりかわして、お客と主人とを酒の中に混合して、高尚な話が盛んにおこって、身の貴賤を忘れて清談にふける。)

という表現が見える。「浮蟻」は「酒滓の浮き上つたもの。酒の上に浮いたあぶら」(諸橋轍次『大漢和辞典』)を指す。「羽爵騰飛。混賓主於浮蟻」は新羅からの使者と日本の文人たちが酒杯を頻りにやりとりしつつ国の違いを超えて渾然となっていく様子を描写した表現。「清談」には①「高尚なはなし」②「老荘を祖述し、世務を捨て俗を離れた清浄無為の空理空談をいふ」(諸橋轍次『同上』)の二つの意味があるが、釈清潭(1927:66)は「老荘の談論」とし林古渓(1958:126)は「俗をはなれた老荘のお話」としている。その一方で小島憲之(1964:117)および江口孝夫(2000:185)は単に「高尚な話」としているが、話の具体的な内容はさておくとしても、お互いの身分の貴賤をも忘れて活発に語り合う「主客渾然」のさまを描写していると言えよう。このように酒が新羅の使者と日本の文人の互いの距離感を縮め、語りあい、ついには興に乗った参席者らの歌が宴の座に流れたことは次のような表現に表われている。

盃酒皆有月。歌声共逐風。(60 肖奈行文)
(どの酒杯の酒にも月の光がうつり、歌声はすべて秋風を追って風に従って流れてゆく。)

国や身分の違いとは関係なく各自が手にしている酒杯に月の光が平等に映り、あちこちから聞こえる歌声がともに風にながれてゆく様子。「皆」「共」という言葉も主客の一体感を表現していると見ることができよう。一方、非渡倭系の作品にも

祖餞百壷。数一寸而酌賢人之酎。琴書左右。言笑縱横。物我両忘。自抜宇宙之表。 (65序 下毛野朝臣虫麻呂)
(送別の宴には数多の酒壷があって[その酒のあぶらが]一寸位に[酒の上に]布き浮んで、人々は濃厚な酒をくむ。琴を左にし、書物を右にし、心のゆくままに存分に語ったり笑ったりする。何もかもすっかり忘れて天地俗塵の外にとび抜ける。)

とある。座には書物と音楽があり、互いに語る声と笑い声が満ちている。そこで「物我両忘。自抜宇宙之表」となる。すなわち「物我」は「ものとわれ。外物と自己。外部と内部。客観と主観」「宇宙」は天地四方上下と古往今来。天地古今。宇は空間をいひ、宙は時間をいふ。転じて世界、又はありとあらゆる存在物の一切を内包する空間」(いずれも諸橋轍次『大漢和辞典』)であるので主客が互いの区別を忘れて渾然となり、すべてを忘れて時間も空間も超越してしまうというのである。

www.kci.go.kr

またこれまで見てきたような「主客渾然」の表現と共に、詩群には新羅の使者と日本の文人の間の同心の交わりを表わす表現も見える。現在も「芝蘭之交」や「金蘭之友」といった言葉がしばしば使われることからも分かるように「蘭」は友情をあらわす際に象徴的に使用される植物である。該当詩群にも「紫蘭」「芝蘭」「金蘭」のように「蘭」を宴の参席者ら同士のゆかしい交わりのシンボルとした表現が目立つ。まず渡倭系では以下のような表現を挙げることができる。

長坂紫蘭。散馥同心之翼。（52序 山田史三方）
(長い坂[庭園の小山にある長く続いた坂]の紫色の蘭はその香を一座の同じ心の人の間にはなつ。)
一面金蘭席。三秋風月時。（62 調忌寸古麻呂）
(この宴席は、一度面会しただけで、すぐ金蘭の如く固くゆかしい交りをするような酒宴の席であり、時は秋の清風名月の季節である。)
置酒開桂賞。倒屣逐蘭期。（77 百済公和麻呂）
(酒を設けて風光やお互の心などを賞美する賞遊の香高い宴を開き、蘭の香の如き同心の良友とちぎる。)

百済公和麻呂の詩に見える「倒屣」は「あわてて履物をさかさまにはいて人を迎へる。心から人を歓迎するにいふ」(諸橋轍次『大漢和辞典』)ことを指す。「屣」は草履・履物を意味する。この表現には新羅からの使者への強い共感と歓迎の気持が表われている。一方、非渡倭系の作品には

有愛金蘭賞。無疲風月筵。（68 長屋王）
(宴席では金蘭の如く堅く親しい交遊を愛することはあっても、清風名月の筵に疲れあきることはない。)

という表現が見える。「風月」という詩語についてはすでに上で主客同心の表現として調忌寸古麻呂の「一面金蘭席。三秋風月時」という句があることを指摘したが、これに加えて長屋王の言うところの「風月」をはじめとする日本古代の漢詩における「風月」という語は、単に秋の景物としての意味を超えて固い友情を結ぶことを風月という季節の風物の中に託していることが先学により指摘されている。12) また韓国の古代漢詩においても「風月」は自然の美しさを称えるものとしても詠まれるが、統一新羅時代の崔致遠の作品では「友情」のシンボルとしても詠まれているという。新羅使と日本の文人たちの間にこうした「風月」という語に対する共通の認識があった可能性は高く、その場合長屋王のいう「風月筵」は清風名月の筵であるとともに友情の筵ということになろう。

12) 余淳宗(2008)「東アジア古代漢詩の風月とそのイメージ」『懐風藻—日本的自然観はどのように成立したか』笠間書院. pp.218-219

www.kci.go.kr

3.3 華夷思想の発露

上で詩群に表れた「別離の悲愁」「主客渾然・主客同心」の表現を見た。そこからは新羅使と日本側の文人の人間的な心の交流の一端を窺うことができる。しかしながらその一方で当時日本には対外的に自国を東アジアの小帝国になぞらえて自らを中華とし、周辺諸国を夷とするいわゆる「華夷思想」にもとづく国際意識が存在したのも事実である。

古代において東アジアの諸国はほとんど例外なくこのように自らを中心とし周辺に夷としての蕃国を設定する国際観を持っていた。たとえば高句麗の場合は5世紀のものと思われる「中原碑」に新羅の王を指して「東夷之寐錦」としているが、これは高句麗に自らを中華とし、新羅を夷とする思想が存在したことを意味し、また百済の場合『日本書紀』553年(欽明天皇14)8月条に見える聖明王上表によると聖明王は加羅諸国を百済の「蕃」と位置づけている。このことから百済にも自らを宗主国とし、加羅を「蕃国」とする意識があったことが推測される。さらに新羅でも「丹陽赤城碑」(545年ごろ)や真興王が各地に設置させた「管境巡狩碑」(6世紀後半)などに「帝王建号」や「朕」などの語が見えることから中国的王権を志向していたことがわかる。新羅は7世紀後半に唐と連合して百済と高句麗を滅亡させたが、滅亡した高句麗の王族安勝を高句麗王に冊立し、百済の遺民や高句麗の遺民に新羅の官位をさずけて自国の王民に編成するなどした。そして8世紀には新たに建国された渤海国の初代王大祚栄に新羅の官位をさずけ(崔致遠「謝不許北国居上表」)、蕃国に位置づけようとしたことが知られる。[13)]

このような国際意識のありかたは日本においても同様であった。養老・神亀期における諸外国の位置づけについては鈴木靖民(1985:157)の指摘のように養老令に「諸蕃」「蕃客」「蕃使」などと見えることからも、日本が周辺諸国を藩屏とみなしていたことがわかる。新羅使もこの点例外ではなく、政治外交上の位置づけはあくまでも「貢朝使」というものであった。このことは『続日本紀』に詩が詠まれた可能性のある719年(養老3)、723年(養老7)、726年(神亀3)の新羅使節の来日に関して「新羅貢調使」「還蕃」「帰蕃」「新羅使貢調物」等と表現されていることからも明らかである[14)]。これは『公式令集解』詔書式条に引く古記が「隣国者大唐、蕃国者新羅」とし、同条集解穴記では外蕃を高句麗、百済、新羅等としているのにも通じる。こうした日本側の華夷意識が新羅使送別宴で詠まれた詩および詩序にも表れていることは否めない。明確な例としては下毛野朝臣虫麻呂の65番詩の序にみえる

> **況乎皇明撫運。時属無為。文軌通而華夷翕欣戴之心。**
> (ましてや明徳の天子は時運(世の中)を丁寧に治め、時が太平の世に当る現在では勿論のことである。文字と車の轍(わだち)とが互いに通じ合い中国もえびすの国も共に天子を喜

13) 酒寄雅史(2001)『渤海と古代の日本』校倉書房. pp.437-444
14) 『続日本紀』所載の関連記事は下に掲げる通り。

nl.go.kr

んで上に戴く心を一ところに集めている。)

という表現である。ここに見える「皇明」は天子の明徳を意味するが、中国皇帝のそれではなく、日本の天皇の徳を指している。また「華夷」の「華」は日本を、「夷」は新羅を含む外国をそれぞれ指し、その人々が「欣戴」すなわち、よろこんで(日本の天皇を)おし戴くという意味になる。律令官人でもあった当時の日本の文人の持っていた華夷思想が表われていると言えよう。また同じく下野虫麻呂の詩に見える

況乃梯山客。垂毛亦比肩。
(まして山にはしごをかけてはるばる海の彼方からやって来た新羅の使者は白い髪を垂らして、この席に肩を並べているのだ。)

という句の「梯山客」については井実充史(1994:61)が唐太宗「武功慶善宮」の「梯山」の用例を引きながら聖代であるので藩国の使者が多く入朝してくると解釈し、万国に君臨する皇帝の如き天皇を賛美する「中華思想」が表れていると指摘している。

そして更には藤原朝臣総前の86番詩に

職貢梯航使。従此及三韓。
(貢物をもって海山を越えてはるばるやって来た新羅の使者は、ここから半島へ帰る。)

とある。上で『続日本紀』に新羅使のことを「新羅貢調使」と記録していることに言及したが「職貢」とは「諸侯藩属の国が、地方の物産等を献上に来る」15) ことを意味する。藤原総前は詩の中で新羅を藩属国と表現しているのである。総前はのち729年(天平1)の長屋王の変に際して長屋王の失脚に影響力を行使した可能性がある人物である。このような両者の政治的立場を考えると、本来客をもてなすべき宴では「華夷思想」は避けるべきであるにもかかわ

719年(養老3)5月	○乙未、新羅貢調使級飡金長言等卌人来朝。
同年閏7月	○癸亥、新羅使人等献調物并騾馬牡牝各一疋。 ○丁卯、賜宴於金長言等。賜国王及長言等禄有差。
同年閏7月	○癸酉、金長言等還蕃。
723年(養老7)8月	○庚子、新羅使韓奈麻金貞宿、副使韓奈麻昔楊節等一十五人来貢。 ○辛丑、宴金貞宿等於朝堂。賜射并奏諸方楽。 ○丁巳、新羅使帰蕃。
726年 (神亀3)夏5月	○辛丑、新羅使薩飡金造近等来朝。
同年6月	○辛亥、天皇臨軒。新羅使貢調物。 ○壬子、饗金造近等於朝堂。賜禄有差。
同年秋7月	○戊子、金奏勲等帰国。賜璽書曰、勅伊飡金順貞、汝卿安撫彼境、忠事我朝。貢調使薩飡金奏勲等奏称、順貞以去年六月卅日卒。哀哉。賢臣守国、為朕股肱。今也則亡。殲我吉士。故贈賻物黄絁一百疋、綿百屯。不遺爾績、式奬遊魂。

15) 林古渓(1958)『懐風藻新註』明治書院. p.86

www.kci.go.kr

らず、敢えて総前はこれを発露したとも考えられるのではないだろうか。他の参席者も華夷思想を懐いていたかも知れないが、礼を尽したという可能性も指摘できよう。

さて、以上は非渡倭系文人の作品に見える華夷思想の発露と思われる表現であるが、それでは渡倭系文人の場合はどうであろうか。山田史三方の52番詩に見える「対揖三朝使。(対揖す三朝の使)」という句に見える「三朝」という語について林古渓(1958:52)は「三朝は礼記にあることば。天子三朝。諸侯三朝。ここでは度度の来朝の使臣」とし、小島憲之(1964:118)「三朝は諸侯のしばしば入朝すること(もとは礼記「天子諸侯皆三朝」による)」としている。これは「朝」を「朝見」の意で使用していると解釈するもので、たとえばやや時代は下るが『凌雲集』に収められている大伴氏上の詩「渤海入朝」に「自従明皇御宝暦。悠悠渤海再三朝」と見えるのもこれと通じる表現と思われる。このように「三朝」の「朝」を朝見するという意味で使われていると見るならば華夷思想の発露である可能性もあるが、異なる解釈もあって、釈清潭(1927:67)、沢田総清(1933:166)、世良亮一(1938:100)、杉本行夫(1943:137)、及び江口孝夫(2000:188)など多くの先行研究は単に「三韓」と解している。従ってこの「三朝」を華夷思想に基づく表現と断定するのには今しばらく慎重を要しよう。

4. おわりに

以上のように『懐風藻』に収められている「於長王宅宴新羅客」詩群の作品に於いて「別離の悲愁・慰労・馳思」「主客渾然・主客同心」「華夷思想の発露」といった要素がどのように表われているかを渡倭系、非渡倭系に分けて検討してみた。その結果を整理すると下に掲げる【表】のようになる。

「別離の悲愁・慰労・馳思」および「主客渾然・主客同心」については渡倭系作者、非渡倭系の作者を問わずどちらの作品にも表われていることがわかった。このうち「主客渾然・主客同心」は若干の差ではあるが非渡倭よりも渡倭系作者の作品に多く詠まれている。このことは、渡倭系の文人らが自身の出自同様海彼からはるばる訪れた新羅からの使者に対してより強い共感を抱いていた可能性を示唆しているのではないか。

一方「華夷思想の発露」については確実な用例は非渡倭系作者の作品にのみ見えることが注目される。この事実は冒頭でも触れたように、詩を残した者のうち渡倭系の文人が半数以上を占めている事実が新羅の使節を招くということに対する主人・長屋王の配慮によるものであったという辰巳正明(1990:103)の指摘を勘案するならば、渡倭系文人たちが自身らの祖先の郷国より訪れた新羅使に対して、礼を失する可能性のある「華夷思想の発露」を詠み込むことを敢えて避けたための結果であると考えられよう。この場合、渡倭系詩

www.kci.go.kr

人らは長屋王の配慮に対して作品を以て応えたことになる。

また宴の主催者たる長屋王がその作品に「別離の悲愁・慰労・馳思」と「主客渾然・主客同心」を詠みこんで、敢えて「華夷思想の発露」について言及しなかったのも同じ理由によるのではないだろうか。

当該詩群の作品は言語風俗を異にする新羅と日本の文人が漢詩文を通じて文雅の交流を行い人間的な温かい心のやりとりをしたことを示唆している反面、当時の日本の華夷思想と呼ぶべき政治外交上の対外観念にとらわれていたことも示している。その中にあって長屋王詩苑に集った渡倭系詩人は日羅関係の安定と和平に努めたであろうことが想像されるのである。

周知のように漢詩には脚韻や平仄、対句など表現上の規則や約束事があり、故実の引用など作者の独創という点では制約を受けるのも事実である。したがって、その作品に表れた内容が全て作者の心情の吐露であると見るのは無理だとの指摘もあろう。しかし、同時に漢詩文が言語の通じない日本人と新羅人の使節との間で、相互の心情と思想を伝達しうる数少ない手段の一つであったことを考えるならば、宴の参加者は漢詩文という手段を通じて能う限り己れの感懐を伝えようとしたと見るのが自然ではないだろうか。

言うまでもなく上代の日本の詩壇・歌壇で渡倭系文人は重きをなしていた。長屋王邸における新羅使送別の宴においても渡倭系文人は外国からの使臣と漢詩文をもって交流するという重要な役割を担った。宴席において詠まれた詩群からは渡倭系文人らが帰国する新羅使を尊重する配慮をもってもてなし、別れを惜しみ、慰労しようとした人間的な心の営みを知ることができるのである。

【表】

	作者名	惜別・慰労・馳思	主客混然・主客同心	華夷思想
渡倭系	山田史三方(52 新羅或いは魏)		○	?
	肖奈王行文(60 高句麗)		○	
	調忌寸古麻呂(62 伽倻或いは漢)		○	
	刀利宣令(63 百済)	○		
	百済公和麻呂(77 百済)	○	○	
	吉田連宜(79 百済)	○		
非渡倭系	下毛野朝臣虫麻呂(65)		○	○
	長屋王(68)	○	○	
	安倍朝臣広庭(71)	○		
	藤原朝臣総前(86)	○		○

www.kci.go.kr

【参考文献】

石母田正(1973)『日本古代国家論』1 岩波書店. pp.355-359
井実充史(1994)「於長王宅宴新羅客 詩の論」『上代文学』73, 上代文学会. pp.53-65
上田正昭(1965)『帰化人』(中公新書) 中央公論社. p.71
江口孝夫(2000)『懐風藻』(講談社学術文庫1452) 講談社. pp.187-280
大野保(1957) 『懐風藻の研究』大岡山書店. p.51
岡田正之(1946)『近江奈良朝の漢文学』養徳社. p.232
加藤謙吉(1986)『古代史研究の最前線』[第1巻政治・経済編] 雄山閣. p.60
小島憲之(1964)『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粋』岩波書店. pp.116-146
小島憲之(1965)『上代日本文学と中国文学』下 塙書房. p.1285
佐伯有清(1971)『新撰姓氏録の研究 研究篇』 吉川弘文館. pp.370-371
佐伯有清(1991)「背奈氏の氏称とその一族」『成城文芸』136, 成城大学文芸学部. p.21
酒寄雅史(2001)『渤海と古代の日本』校倉書房. pp.437-444
沢田総清(1933)『懐風藻註釈』大岡山書店. pp.96-140
釈清潭(1927)『懐風藻新釈』丙午出版社. pp.63-101
末松保和(1961)『任那興亡史』吉川弘文館. pp.31-33
杉本行夫(1943)『懐風藻』弘文堂書房. pp.131-198
鈴木靖民(1985)『古代対外関係史の研究』吉川弘文館. pp.156-157
世良亮一(1938)『懐風藻詳釈』教育出版社. pp.96-140
辰巳正明(1990)『長屋王とその時代』新典社. p.103
林古渓(1958)『懐風藻新註』明治書院. pp.125-184
星野五彦(1980)『万葉の展開』桜楓社. p.95
村田正博(1984)「上代の詩苑―長王宅における新羅使饗応の宴―」『人文研究』第36巻第8分冊, 大阪市立大学文学部. pp.23-30
余淳宗(2008)「東アジア古代漢詩の風月とそのイメージ」『懐風藻―日本的自然観はどのように成立したか』笠間書院. pp.218-219

www.kci.go.kr

要 旨

現存する日本最古の漢詩集『懐風藻』には作宝楼と呼ばれた長屋王の私邸に於いて新羅からの使者を饗応した際に詠まれた「於長王宅宴新羅客」あるいは「於宝宅宴新羅客」との題を持つ詩群が収載されている。本稿では詩群の作品に於いて「別離の悲愁・慰労・馳思」「主客渾然・主客同心」「華夷思想の発露」といった要素がどのように表われているかを渡倭系、非渡倭系に分けて検討してみた。

「別離の悲愁・慰労・馳思」および「主客渾然・主客同心」については渡倭系作者、非渡倭系の作者を問わずどちらの作品にも表われていることがわかった。その反面「華夷思想の発露」については確実な用例は非渡倭系作者の作品にのみ見えることが注目される。この事実は詩を残した者のうち渡倭系の文人が半数以上を占めている事実が新羅の使節を招くということに対する主人・長屋王の配慮によるものであったという辰巳正明(1990)の指摘を勘案するならば、渡倭系文人たちが自身らの祖先の郷国より訪れた新羅使に対して、礼を失する可能性のある「華夷思想の発露」を詠み込むことを敢えて避けたための結果であると考えられよう。また宴の主催者たる長屋王がその作品に「別離の悲愁・慰労・馳思」と「主客渾然・主客同心」を詠みこんで、敢えて「華夷思想の発露」について言及しなかったのも同じ理由によるのではないだろうか。

当該詩群の作品は言語風俗を異にする新羅と日本の文人が漢詩文を通じて文雅の交流を行い、温かい心のやりとりをしたことを示唆している反面、当時の政治外交上の対外観念にとらわれていたことも示している。その中にあって長屋王詩苑に集った渡倭系詩人は日羅関係の安定と和平に努めたであろうことが想像される。宴席において詠まれた詩群からは渡倭系文人らが帰国する新羅使を尊重する配慮をもってもてなし、別れを惜しみ、彼らを慰労しようとした人間的な心の営みを知ることができるのである。

キーワード：懐風藻、「於長王宅宴新羅客」詩群、新羅使、長屋王詩苑、渡倭系文人、別離の悲愁、主客渾然、華夷思想の発露

투　　고：2012. 2. 29
1차 심사：2012. 3. 17
2차 심사：2012. 4. 7

www.kci.go.kr